

研究ノート

## 高専独自のシラバス開発への試案

投野 由紀夫

平成 2 年 7 月 15 日

東京都立航空工業高等専門学校  
平成元年度研究紀要 第27号 抜刷

## 高専独自のシラバス開発への試案<sup>(1)</sup>

(平成2年1月31日受理)

投 野 由 紀 夫

### 0. はじめに

最近の我が校の卒業生の就職先を見ると、海外に支社や工場を持つ会社が非常に多く、またそうでなくとも外国の取り引き先が必ずあり、何らかの形で海外との接触があるのが当り前のような状況である。工場見学などに出かけて、卒業生の話を聞くと、専門教科もさることながら、語学力の必要性を必ず聞かされる。専門教科の先生方に話を聞いても、異口同音に語学は欠かせないと言われる。

振り返って、高専で英語を直接教えている立場で考えると、この5年間で高まっていく英語力のニーズに反して、学生は勉強しなくなり、英語の力は一向についていないように思える。実態はどうか？ 対策はないのか？ この小論では、高専生の英語力を伸ばすために、思い切ったシラバスの改革を提案し、その試案として、task-based syllabus<sup>(2)</sup>の導入の可能性を考えてみたい。

### 1. 高専生の英語力

表1は、都立航空高専の平成元年度第1回実用英語検定試験の3級合格者をまとめたものである。1年生は希望者、4年生は必修選択でL1を受講している学生全員に受験してもらった。1年生の合格率は希望者ということもあったがほぼ全国並みなのに対して、4年生の合格率は全国レベルに比しても極端に低い。

	1年	4年	全 国	
受 験 者	50	44		
1次合格	45(90%)	30(68%)	高1	短大・大学
2次合格	30(60%)	16(36%)	59.9%	59.8%

表1 平成元年度第1回実用英語検定試験3級合格者

この表を見る限り、1年から4年までの間の英語学習の効果はあまり上がっていないと言わざるを得ない。他高専の英語の先生方にお会いしても、高学年になるにしたがって、英語力の伸び悩みは切実な問題のようである。その原因はいろいろ考えられるが、次のような点が特に挙げられよう。

- (1) 中学の内容が理解できていないまま高度な内容に進んでしまう。
- (2) 5年間、受験などの目標がないままやる気をなくしてしまう。
- (3) 専門科目の勉強がどうしても中心になり、語学の勉強は手薄になる。

このうちで、中学の内容が分からないまま授業についていけなくなっている学生は相当数おり、それぞれの先生方が補講などの対策を取ってはいるが限界もあり、その効果はあまり期待できない。

もしこのままの形で続けていけば、これらの3点について、具体的な対策もないままに、学生の英語力はますます低下の一途をたどるであろう。筆者はこの現状に対し、高専の置かれている環境を逆手に取るような効果を期待できる方法はないかどうかを検討してみた。その結果、次節に述べるような具体的な理由で、根本的な指導内容および方法の改革、すなわち全く新しいsyllabusの導入が最も興味深い結果をもたらすのではないか、という結論に達した。

## 2. 新syllabus作成の動機

新しく syllabus を作成する理由は、以下の通りである：

- (1) 5年制の一貫教育：高専の5年間は、悪い要素にもなるが、逆に語学教育の面からいけば、ある一定の指導によってその効果が本当に現れるかを見るには好適な期間である。また、基礎力不足の者にも十分に実力をつけ直してやることの出来る期間である。5年間に有効に利用するような構成の syllabus を作ることで、5年間に真に生かすことが出来る。
- (2) 学習指導要領に束縛されない：中学、高校では学習指導要領の影響力が大きい。各学年に文法事項が配当され、教科書は厳しく検定され、使用語いまで決まっている。このような制限の中では、自由に文法事項の配列を変えたり、また重要な事項を時間をかけて繰り返し練習するような時間はとても取れない。どうしても各文法項目が定着するのかがどうかも分からずに、ただ説明されていくだけ、という状況も珍しくはない。高専は高等教育機関に属するので、学習指導要領に束縛されずに、指導内容、指導方法、等を決めることが出来る。これによって、新しい syllabus を作ることがより容易にできる環境にある、と言える。
- (3) 受験英語に影響されない：受験の与える動機付けは確かに非常に強烈であるが、一方で現在の受験英語の弊害は周知の事実である。かなりの改善は見られるものの、試験問題は今だに運用能力を問うものというよりは文法知識の確認、複雑な文法構造の認知、英和・和英の翻訳作業のようなものが多い。高校も受験のためにその内容が、どうしてもこれらの知識の獲得と定着に終始してしまい、英語を使う、という技術面、道具としての意識、が非常に薄い。一方高専では、受験に影響されることがなく、それが一つには英語力が伸び悩む一因となっているのだが、逆に英語を純粋にスキルとして教えることが可能だ。卒業してからの、「使える英語」に焦点を絞った指導を行ない、卒業生の運用能力をアップさせれば、企業の高専生に対する評価もさらに高くなる。
- (4) 高等教育機関としてふさわしい試み：新しい syllabus の作成や導入はどこでもできるものではない。それはやはりそのために syllabus 研究に関われる語学教育のプロがいて、かつ、十分な研究環境が整っており、実施に当たっても自分達のプログラムの効果を経年的に調査できるような環境が必要だ。高専はこの意味では、最適である。上記3点の理由と合わせて syllabus 開発のプロジェクトを進めれば、それにふさわしい語学、教育の各分野の教員がおり、研究予算も一般の中学高校とは比較にならないほど充実している。開発したものを試験的に実施してみることもでき、それによって研究成果を期待できる。まさしく高等教育機関としてふさわしい試みである。これによって、高専のみならず、一般のカリキュラムにも影響を及ぼすような syllabus の効果が実証されれば、日本の英語教育にとっても大きな財産となる。

## 3. 新syllabusの満たすべき条件

Syllabus は教育政策と言った行政レベルから、個々の学習者のレベルまで、幅広い観点から決められるものであるが、ここではそのような総合的な観点からの syllabus の分析はせずに、単純に次の点を強調した course design を考えてみたい。すなわち、「中学3年間で習ったことを、4技能に渡って駆使できる最低限の英語力をつける」ということである。

前述したとおり、高専に入ってからのおつまずきの原因の一つは、中学英語の理解が不十分なことである。しかし、仮に中学の範囲の英語が試験でよい点が取れても、はたして何人がその範囲の英語を使えるのだろうか？ある文が読めて、意味が言えるとしても、それを正しい context の中で、話したり書いたり出来るかは、また別問題だ。むしろ、現在の英語教育は、高専に限らず、非常に片寄った技能（例えば読むことだけ）を断片的に教えており、それが往々にして、知識として身につけて、技能

になっていないことが多いのではないだろうか。

筆者がこのsyllabusで目標にしたいのは、中学で習った英語でもそれを自由に読み、書き、話し、聞くことの出来る最低限の英語力である。それは「使える英語」の基本的な条件であり、今後の日本の社会に出るものに必要な力だと思う。ましてや、卒業後すぐに企業に勤め、即戦力となる高専生には、文学作品の鑑賞よりも、何とか契約を取ってくるような会話力、相手と文書で意思を疎通する表現力、理解力のほうが大切だ。就職が決まると、会社から通達があり、彼等はいきなりTOEICなどの準備をさせられて必死で勉強する。我々教師のお株を奪われていると言わねばならない。5年の時期で英検3級も取れないような英語力では、会社のニーズにも答えられない。

この「中学英語を使いこなす」という目標を実現するためのsyllabusを作るには、非常に重要な作業が必要だ。それは、中学英語の範囲で、4技能のそれぞれについて、具体的にどのような技能を目標として設定し、それに到達していくためにどのような課題を出せばよいか、というtaskの決定である。

次の章で、これらの点について具体的に見ていくことにしよう。

#### 4. Taskの決定

Taskの話に入る前に、現在のsyllabusの問題点を指摘する意味で、筆者が行なった簡単な実験の結果を見てみよう。

##### 4.1. Task別の理解度の差に関する実験結果

これは、「同じ教材でも、taskを変えることで、理解度に差が出る」という仮説を検証した実験の結果である。航空高専の4年生85人を無作為に抽出して3グループに分けた。これらのグループにそれぞれ同一の英文を与え、次のような3種類のtaskを課した：

グループA：読んで全文を日本語にする

グループB：1分間で黙読する

グループC：教師が音読するのを聞く

その後、内容に関して、3グループ共通のT-F testを行なった（英文と設問に関しては、付録参照）。その結果は、表2のようになった。これを見る限り、訳読・速読に比して聞き取りの結果は明らかに悪い。技能的には、このどれもが、バランスよく身につけていねばならないのだが、実際には、このような差が生じる。言い換えれば、辞書を使って読めても聞いて分からない、ということが実際にあるわけで、このような片寄りをそのままにしておいて、ただ教科書の内容だけが高度になれば、それで生徒の能力も上がると考えるのは、おかしいことになる。このような現実を踏まえて、実際にtaskの分類と配列にもとづいたシラバスを作りたいわけだが、始めにtaskの決定に関して見てみよう。

	グループA	グループB	グループC
人数	30	30	25
平均点	81.7	76.9	65.3

表2 Task別の理解度の差

##### 4.2.0

中学英語において各4技能の目標を設定していくには、その切り口として、いくつかの観点が考えられる。主なものは、(1) 文法事項、(2) 言語教材、(3) 機能、があげられるが、そのどれに関して

も、さまざまなtaskが可能である。

#### 4.2.1.文法事項 (grammatical items)

例えば、現在完了の例を考えてみたい。(1)のような文に対して、一体どれだけのtaskを考えられるだろうか？

(1) I have just finished my homework.

少なくとも、4技能の各面において、次のようなことが出来ることが望ましいと考えられるであろう。

- |              |                    |
|--------------|--------------------|
| a) 正しく読める    | d) 聞いて意味が理解できる     |
| b) 読んで意味が言える | e) 会話において適切な場面で使える |
| c) 正しく書ける    | f) 文中で意味が取れる など    |

1つの文法事項でも、それが自由自在にあやつれるためには、これらの点に関して、適切なtaskの選択が必要である。しかし、現状では文法事項の導入で精一杯で、それを4技能のバランスを保ち、駆使できるようにする活動を盛り込んだカリキュラムになっていない。

#### 4.2.2.言語教材 (materials)

これに関しても、1つの教材の扱い方には、さまざまなtaskが考えられる。

例えば、中学3年の教科書中の英文1レッスン分を例にとって考えてみよう。これに対して、ただ辞書を引いて訳させるような作業だけしては、いつまでも使える英語にならない。それでは、どのような作業が可能だろうか？以下に、考えつくままに例を挙げてみよう：

- a) X分で黙読して、大意を日本語（または英語）で書く
- b) 音読されたのを聞いて、大意を日本語（または英語）で書く
- c) X分で黙読して、大意を英語で話す
- d) 黙読して（または音読されたのを聞いて）それに関する英語の問答をする
- e) Blanksを作っておいて、聞いて書き取らせる
- f) 前文を書き取らせる
- g) 物語ならば、前半を読ませて、後半を自分で英語で書いてみる
- h) 会話が多い文ならば、スキットに書き直してみる
- i) 手紙文ならば、それをモデルにして、自分で手紙を書いてみる
- j) 段落ごとにバラバラにして並べ替えさせる
- k) その他

1つの英文に対しても、このようにさまざまなtaskが考えられるのに、我が国の英語教育においては、文法事項と英文のみが学年を追うにつれて複雑になるだけで、案外簡単な英文に対して、こう言ったtaskが出来ないのが現状ではないだろうか。

#### 4.2.3.機能 (function)

言語の持つ機能の観点からの分類にも、このtaskの与え方は適用される。例えば、「相手に要求する」という機能を考えてみよう。この機能を持つ表現はいろいろ考えられる（例：Please～; Would you mind～?; I would like you to～; I would appreciate it if～; etc.）が、これにも目標となる次のようなポイントが考えられる：

- a) その表現を聞いて（読んで）分かる
- b) その表現を正しく発音できる（書ける）
- c) その表現と他の表現の違いが分かる

d) その表現を適切な場面で使える

機能ごとに言語材料を分類したときも、個々の表現は、文法事項のところに挙げたような諸点に関して、taskを考える必要がある。

### 5. Taskの難易度に応じたsyllabusの開発

4. で見てきたように、中学英語の内容といっても、個々の文法事項、教材、機能に関してさまざまなtaskが可能である。しかし、繰り返し述べているように現在の中学から高校にかけての英語のカリキュラムでは文法・文型のウィンドウショッピング的な感じで、一応どう言うものか、という紹介だけされても、それを用いて何かが出来るということが非常に稀薄である。今後、運用能力を高めるためには、目標とすべき英語のレベルは中学程度でも、それを前述したようなさまざまな面において徹底して使いこなせるような力をつけることを中心としたsyllabusの編成を考える必要がある。

具体的には、まず次のような作業が必要となるだろう：

- (1) Taskの分類を精密に行なうこと：文法事項で分けるにせよ機能で分けるにせよ、それぞれの項目において、上記のようなtaskの設定が不可欠だ。そのためにも、各項目において、どのようなtaskが可能か、また、必要かを定める。
- (2) Task間の難易度を判定すること：task Aとtask Bの間に、難易度の差があるとすれば、易から難へと配列する必要がある。

(例) 文法事項 X

第1学年：「Xの入った1文を読んで、意味が分かる」

「Xの入った1文を聞いて、意味が分かる」

第2学年：「Xの入った文を、言える(書ける)」

第3学年：「Xの入った文を、文脈の中で適切に書ける」

「Xの入った文を、会話の中で適切に使える」

同じreadingやlisteningでも、taskをこなす速度や教材自体の難易度を調整することで、taskのレベルが変わる。このようにして、最適なtaskの種類と、その難易度を判定することによって、学年配当なども決まってくる。

今後、これらの点に関して研究を進め、taskの難易度に応じた活動の配列を行なうことで、学習者は、基本的な英文の構造(または機能)について、4技能に渡って必要十分な運用能力がつけられる授業を受けることが出来る。

### 6. 今後の課題

以上のような方向性を持ったsyllabus開発の試みは、学習指導要領に束縛された現状の中学・高校では非常に困難である。しかし、高専では多いに期待できる、と筆者は信じている。この際、新syllabus開発に向けて、問題点を解明し、具体的なプログラムにするためのプロジェクトチームを発足させてはどうだろうか。科学研究費などを積極的に取って、高専の人文系の研究レベルをあげることが出来ればそれに越したことはないし、将来試験的にsyllabusを実施してみて、その効果を長期的(例えば5年間)に調査し研究報告をすれば、これはPrabhu(1987)のthe Bangalore Projectに匹敵するような非常に貴重な研究となろう。

最後に、今後研究を進めていく際に、出てくるであろう問題点をあげておこう。まず第1に考えねばならないのは、このようなシラバスに対応できる教師の養成である。高専におられる先生方はおおむね運用能力に問題はないだろうが、それでも自分の今までやってきた教え方に固執する人はいると思う。文法訳読中心の授業からいきなり話したり聞いたり授業では勝手が違うかもしれない。しか

し、始めはそういう授業に抵抗のない教師が率先して実行に移し、徐々に回りを巻き込んでいくしかないであろう。そのためには、出来れば、同じ教師（または開発グループ）が1年から5年まで持ち上がりで、一貫教育できるような配慮が必要になろう。

第2に、実際にこのような授業を実行するときには、クラス人数の問題は深刻だ。現在のような40名を越すサイズでは会話の授業は難しい。この問題を解消するためにはグループワークを生かしたtaskなどの工夫といった授業形態の面と、現実的に小人数制のクラスを実現していく行政面での働きかけの両方が必要となろう。

第3に、これは何にでも言えることだが、生徒の動機付けの問題である。本来なら、このような授業になれば生徒が喜ぶ、と言いたいところだが、現実にはどのような授業内容にしても、やる気のない生徒がいるものだ。そのためには、多少instrumentalな動機付けもやむを得ないであろう。例えば、コース全体を資格取得のためのものと位置付けるとか、ある過程まで終了して、テストにパスしたものは、校長から賞状と記念品が出るとか、そう言った釣玉のようなものは、英語に目覚めていない彼等にとってどうしても必要となってくるだろう。

## 7. おわりに

以上、taskの与え方をもとにした新syllabusの開発の提案とその試案を検討してきたが、まだ考えねばならない問題が数多くあるはずである。これを発端として、高専における新しい英語のsyllabusの論議が活発になるように願っている。願わくは、この新しいsyllabusの開発を機会に、高専の存在価値が再び見直され、英語教育界全体に影響を及ぼしていくような最先端の研究機関となることができれば素晴らしい。そのためには、出来るか出来ないかの可能性の論議ばかりで終わるのでなく、試験的にでもやってみることが必要ではないだろうか。

注：(1) 本論は、平成元年度全国高等専門学校英語教育研究審議会（COCET）研究大会（11月23日）において「高専独自のシラバス開発への試案」と題して行なった研究発表に加筆修正したものである。

(2) ここで言うtask-based syllabusの内容は、Prabhu(1987)やYalden(1987)の言っているのとは、若干異なる。彼等が、言語を使って行なう具体的目的のある活動（例えば、時刻表を見ながら、列車の発着について会話する、など）のを中心taskと言っているのに対し、ここでは単に、その言語材料を学習者が内在化し、使用するために役立つ活動のことを言っている。

### 参考文献：

- Ounby, J. (1978) Communicative Syllabus Design. Cambridge: Cambridge University Press.  
 Prabhu, N.S. (1987) Second Language Pedagogy. Oxford: Oxford University Press.  
 Yalden, J. (1987) Principles of Course Design for Language Teaching.  
 Cambridge: Cambridge University Press.

### 付録： 実験に使った英文および設問

In England nobody under the age of eighteen is allowed to drink in a public bar. Mr.Thompson used to go to a bar near his house quite often, but he never took his son, because he was too young. Then when Tom had his eighteenth birthday, Mr.Thompson took him to his usual bar for the first time. They drank for half an hour, and then Mr.Thompson said to his son, "Now, Tom, I want to teach you a useful lesson. You must always be careful not to drink too much.

And how do you know when you've had enough? Well, I tell you. Do you see those two lights at the end of the bar? When they seem to have become four, you've had enough and should go home."

"But Dad," said Tom, "I can only see one light at the end of the bar."

【設問】本文の内容と一致するものには○を、一致しないものには×を下さい。

1. When Tom was eighteen, his father took him to a public bar.
2. Mr.Thompson wanted to teach Tom not to drink too much.
3. Mr.Thompson thought he saw four lights.
4. Mr.Thompson was not as drunk as his son.
5. Actually the bar had the only one light at the end of it.